

会 議 録

☐ 全部記録 ☒ 要点記録

1 会議名	第 2 回姫路市立小中学校適正規模・適正配置審議会
2 開催日時	平成 3 0 年 7 月 2 7 日（金曜日） 1 4 時 0 0 分～1 6 時 1 6 分
3 開催場所	姫路市役所 1 0 階 第 3 会議室
4 出席者	（出席者）姫路市立小中学校適正規模・適正配置審議会委員 1 0 名 （事務局）教育長、教育次長、教育総務部長、学校教育部長、総務課長、 学校施設課長、教職員課長、学校指導課長
5 傍聴の可否及び傍聴人数	傍聴可、傍聴人 6 名
6 次第	1 開 会 2 挨 拶 3 議 事 （1）適正規模及び適正配置に向けた方策について （2）適正規模及び適正配置に向けた具体的な取組について 4 連絡事項 5 閉 会
7 会議の要点内容	以下のとおり

事務局	1 開会 第2回姫路市立小中学校適正規模・適正配置審議会を開会する。
教育長	2 挨拶 (教育長挨拶) 本日は、姫路市立小中学校適正規模・適正配置審議会に御出席いただき誠に感謝している。平素は、本市の教育行政の推進に多大な御支援をいただいていることを、改めてお礼申し上げる。 さて、前回の審議会においては、国や他市の動向、本市の児童生徒数の見込み等を踏まえて、小学校及び中学校の適正規模について、御審議いただいた。その結果、学校教育においては、集団の中で多様な考えに触れ、切磋琢磨することを通じて、一人一人の資質や能力を伸ばしていくためには、クラス替えが必要であるという認識の下、小学校については12～24学級、中学校については9～24学級が適正規模であると意見の取りまとめがなされた。 本日は、前回の結論を踏まえ、適正規模とならない学校、つまり、適正規模を下回る小規模校及び適正規模を上回る大規模校における、適正規模・適正配置に向けた取組方策について御審議いただきたいと考えている。 教育委員会としては、学校は児童生徒の教育のために設置されている施設であり、飽くまでも児童生徒の教育条件の改善の観点を中心に据え、適正規模を確保することを第一に考えているが、委員の皆様においては、それぞれの立場から様々な御意見や御提案をいただきながら審議を進めていただければと考えている。よろしくお願い申し上げます。
事務局	会議成立報告
会長	(公開可否の決定) 本日の審議会は、異議がなければ公開とするがよいか。(異議なし) 異議なしと認めて公開とする。
会長	(第1回会議録の確認) 第1回審議会の会議録について修正等の意見はあるか。(意見なし)

会長	会議録として決定する。 (説明聴取可否の決定) 姫路市立小中学校の適正規模・適正配置の審議を進めていくに当たり、第1回審議会で適正規模とした小学校12～24学級に入らない小学校の状況を把握するため、本審議会において、小規模小学校2校及び大規模小学校1校から学校の状況説明を聴取したいと思うがいかがか。(異議なし) 異議なしと認めて小規模校及び大規模校の状況について説明いただく。 (各小学校から状況説明)
小学校1	ユネスコスクールに申請中で、現在文科省に書類を提出し、パリ本部からの返事を待っている状態である。本校は、ホタル採取や異文化交流を行っている。以前から取り組んできた活動が、ユネスコスクールの理念に合致したので申請をした。ホタル採取は近隣の方にも来ていただいている。採りすぎたホタルは川に戻し、3、4年生が飼育し、川に放つという環境教育である。異文化交流については、昨年度はブラジル、本年度はインドの方と交流した。和太鼓も長年やっている。兵庫県では、小学校の認定校はまだない。 学級数は、3学級で完全複式となっている。しかし、来年度は完全複式を解消できる。 学校規模が小さいことによるメリットは、きめ細かな指導や反復学習が徹底してできること。目が行き届く生活指導ができること。一人一人が主役となって活躍場面が多いこと。運動会では、休む間もなく出場している状態である。多様な学習形態として、複式学級では「ずらし」や「わたり」といった手法がある。8月には、三田市に研修に行く予定である。ESD教育は、持続可能な開発のための教育のことで、新聞でも紹介されていたが、兵庫県の中でも増えていき、意識が高まっていくことを願っている。複式学級であるが故に複数の教材の準備や授業形態の工夫が必要となり、教師のスキルアップが図れる。地域活性化プラン、市・大学・新聞社等の支援については、後ほど自治会長から説明していただく。ASPnetでの学校間交流が一番の特徴である。修学旅行や自然学校、林間学舎は近隣の小学校と一緒にいくなどの交流は今でも行っているが、ユネスコスクールになると、海外の学校とテレビ会議などにより交流が爆発的に増える。小規模校で懸念される課題がかなり補えるのではないかなと思う。

次に課題である。多様な学習集団を編成しにくい。競争心が育ちにくい。複式学級の編制が人数により変わる。教職員一人当たりの校務分掌が多い。出張にあまり行けない。教材研究や準備を2学年分しなければならない。PTA活動の負担が大きい。地域の高齢化により人材確保が難しい。

次に、地域からの支援・地域との関連として、姫路市ががんばる地域応援事業は後ほど説明する。5年先、10年先を見据えたビジョン。北小は計画の核。運動会、学習発表会は地域の方が楽しみにしている。親から子、子から孫に続く伝統ということで、和太鼓。森林体験フェアというのは、この秋に初めて関地区で行う。関火祭りは先日実施された。鼓笛隊は、小さい学校なのに鼓笛隊があることに驚いたが、素晴らしい。ホタルの飼育。ふるさと先生については、校長室の壁でたくさんの先生を紹介している。

おわりに、不登校児童生徒の現状ということで、姫路市内でも不登校生が若干増えているように思う。その子たちは、自宅に引きこもったり、総合教育センターの適応指導教室に行ったり、フリースクールに行ったりしている。その子たちが、別の公立学校で再チャレンジの機会を与えていただければというのが私の考えである。義務教育の保障ということで、更なる選択肢を姫路市から与えていただけると、不登校生を減らすことができる。

子供の状態や保護者の願いとして、アトピーや喘息などの健康状態である子供を持つ親は自然の中で学ばせたいと考えられる方もおられるだろう。少人数で目配りができる学校で学ばせたい、自由でのびのびと学ばせたい、活躍できる場面が多いと考えている方もおられると思う。そのような方のために、学校選択の機会の拡大ということで小規模特認校制度。

最後に、姫路市の人口統計から一部抜粋してきたものであるが、本校と隣接校を合わせてもクラス替えができる適正規模にならないというデータである。適正規模にするにはかなり範囲を広げないと難しい。そうすれば、子供たちの通学距離も長くなるので、私としては、特認校制度をお願いしたい。

姫路市が進めている中で、二つの取組がある。一つは、産業局が進めている中山間集落の活性化を目指した北部農山村地域活性化基本計画。これは、農林業の振興と定住人口の増加が柱となっている。もう一つは、市長公室が進めているがんばる地域応援事業。これは、学校の環境整備や外からの移住などを柱にしている。この審議会に

小学校 2	についても、このようなことに取り組むべきではないかという意見を持っている。地域というのは、自然があって、子供の声が聞こえてこそ、地域である。我々も地域として応援している。 学校の体験活動では、1時間の中で全ての子供が体験できるように準備をし、大勢ではできないようなことでも、ここでは全ての子供に体験させ、片付けまで全部させることができる。子供たちの見守りについても、子供が普段と違った動きをすれば、すぐに保護者に電話がいくようになっている。子供を大事にすることを一番に考えている。それは、地域による人づくりである。特に教育行政においては、大事なことである。これからの姫路を背負って立つ子供たちへの経費を惜しむというのは、良くないことである。姫路市は、お金をかけて人を育てることが大事である。本校については、小規模特認校制度により、学校へ通にくい子供の受入れをしていくべきである。学校行けないことへの親の苦痛は、想像に絶するものがある。学校教育を受けさせるのは親の義務であり、親の願いである。本校区の学校について格別の御配慮をしていただきたい。 本校は、明治7年、1874年に創立した伝統ある学校である。児童数は29名で2、3年生と4、5年生が複式の4学級となっている。 学校が小さいことによるメリットについて、地域の方は、子供が伸び伸びと育つ、どの子も明るく真面目で子供らしい、あいさつをよくする、学校でも一人一人が大切にされている、と言っている。学校では、学習面においては、きめ細かな指導ができ、学力は向上している。苦手なところや分かりにくいところがある子供には、個別指導をして対応している。いわゆる落ちこぼれはいない。理解しているかどうか、授業の最後には、まとめやプリントをすることにより、すぐにチェックができ基礎学力も伸びている。授業中、進んで一人一人が考えを発表し、活躍の場がたいへん多い。1時間の授業で何回も発表し、話し合いもできている。何をするときも、一人一人が主役になっている。4、5、6年で委員会活動をしているが、4年生でも一人で朝、昼の放送をきちんとしている。常に縦割り集団で行動し、思いやりや優しさが身に付いている。登校時等、どんなときも、高学年が低学年に優しく話をしている。6年生が1年生に田植えの仕方を教えたり、プールの入り方を教えたりしている。入学式、卒業式は、全校生の参加で祝っている。プール掃除も全校生で行い、5年生が自然学校から帰ってきたときには、全員で迎える。子供たちが中学校に行っても、積極性があり、
--------------	--

進んでクラスのリーダーとして頑張っている。学力も学年上位の生徒が多いと聞いている。児童の情報は、常に教員が共有し、何かあればすぐに対応することができる。教師に余裕があり、テストやプリントを見る時間が少なくてすむので、子供一人一人にじっくり向かい合うことができる。PTA会長は、学校、地域コミュニティが活発で、子供たちは学校で地域の人材から多くのことを学んでいると言っている。

学校規模が小さいことによる課題は、一つ目には、クラスの中だけでは色々な考えに触れることが少ないと考える。そこで、5、6年生と一緒に体育や特別活動などの授業をし、意見を出し合って色々な人の話を聞いている。また、他の学校と林間学舎や自然学校、修学旅行で交流している。今後は、パソコンなどを通して授業の意見を言い合うこともできるのではないかと考えている。二つ目の課題は、多くの人に一度に接することが少ないことである。そこで、姫路市小学生陸上競技大会など、人がたくさん集まる場に連れて行き、出場させている。5年生が4人参加し、3名が入賞し、たいへん自信をつけたのではないかなと思う。昨年は、県立大学で開かれたジャコウアゲハサミットに参加して、大きな舞台で発表した。

次に、地域からの支援、地域との連携であるが、学校行事に地域の方が進んで参加してくださっている。ふれあい給食では、保護者、地域の方、全校生が体育館で一緒に食べた。ふれあい給食といえば、1年生の親が1年生の教室で食べるのが普通であるが、そのようなことができた。9月の初めに予定されているそうめん流しも、地域の方が計画してくださっている。子供、親、祖父母が対話したり活動したりすることにより、三世代交流、地域コミュニケーションが既にできている。自治会が、地域活性化策として推進している、アザミを中心とした花づくりと連携して、ジャコウアゲハを育てる活動に、今、力を入れている。農業体験、食育指導など地域資源や人材を生かし、体験を通した学習を実施している。朝の登校時には、どの登校班にも見守り隊の方がついて、子供たちの安全を見守ってくださっている。お巡りさんがついてくださっている班もある。毎朝、校門の前で話をする場があり、そこで地域の情報や子供の情報が入る。

前日も傍聴させていただいたが、小規模校にも色々な課題があるという話であった。私は、色々な課題があると言われているが、本校で子供たちにさせていただいている教育に大変満足している。見ていると、一人一人にしっかりと力を付けていただけている。本校の先生の頑張りや、教育委員会からの支援のおかげであると思っている。こ

のことは、感謝申し上げたいと思う。ところが、残念ながら校区を見ると、少子高齢化、人口減が続いている。連合自治会長としてなんとかしたいと思っていたところ、姫路市で北部農山村地域活性化構想が出された。そこでなんとか、本校区を含む地域の再生を願おうということで、市に検討会を立ち上げていただいた。そして、話し合いを持っていたらということで、すごく希望を持ち、その場で意見も述べた。持続するコミュニティの形成ということが大事であると思う。自分なりに考えてみて、担い手がいらないということは困ると思う。そのためには、担い手を増やさなければならない。若い子供がいる親に是非来てほしいと思う。そのためにできることは、一つは、本校で行われている教育。これは一つの本校区の魅力であると思う。この魅力をもっと市内に発信して、自分の子供を行かせようと思ってもらえる人を作ったり、子供が本校区で育って、「よし、大きくなったら本校区で頑張って、地域の担い手になるぞ」という子供を育てたりしてほしいと思う。そう考えると、小学校は、教育委員会は子供のための教育施設と言ったが、我々から言えば、もちろん子供はそうであるが、地域の創生を担う、核となる大事な機関ではないかと思う。少子高齢化の問題は、国全体の本当に難しい問題であると思う。姫路市の担当部局だけが取り組んで、できる問題ではない。そういう意味で言うと、姫路市全体が横断的に組織的に、少子高齢化の問題について取り組んでいていただきたい、とお願いして発表としたい。

小学校 3

本校区は 14 の自治会、世帯数 5,600、人口約 1 万 3 千 500 人、近年に人口が急増した校区である。南部は鉄工業を中心とした工業地域で、北部も住宅地域に変わってきている。

全校生は、1,037 人。学級数は、特別支援学級の 2 学級を含めると、全 34 学級となる。

学校が大きいことによるメリットは、集団の中で、多様な考え方に触れ、対話的な学びの展開が図りやすい。学校行事等の集団教育活動に活気が見られるということで、特に運動会や音楽会において、学年集団で作りに上げたという成果が見えやすい。全校生の紅白対抗も迫力がある。多様な集団形成や豊かな人間関係づくりが行いやすいということで、クラスが 5 クラスあるので、クラス替えの中で人間関係を組みやすい、クラスの中で 30 人から 40 人いるので、班編成が色々作りやすい。人間関係が固定化しにくいことがメリットである。色々な人間関係づくりができる。集団生活を通して、社会性や協調性、たくましさ等を育みやすい。職員の面から言うと、年齢、経験、得

意分野を考え、1 学年が 4 から 5 クラスある中で、バランスのとれた教職員の配置が行いやすい。40 人を超える教職員がいるので、組織的に自分の得意分野の中で、校務分掌を組みやすい。一人が抱え込むと大変な分掌も、皆で分け軽減でき、機能しやすい。専科の教員などがフォローできるため、出張や研修等に参加しやすい。学校全体で組織的な指導体制が組みやすい。生活指導委員会や特別活動委員会、体育部会など部会に分かれてそれぞれの先生が組織的に話し合いを持つことができる。それらをいかに調整するかについては課題であるが、それぞれが役割分担して組織的に動くことができる。教職員同士の相談・研究・協力が行いやすい。PTA 会長に何うと、PTA 活動等において、保護者の負担が分散しやすいと言われていた。

次に学校規模が大きいことによる課題であるが、学習面、生活面において、全職員による児童一人一人の把握が難しい。人数が多いので、当然、課題を持ったり配慮を要したりする子供もたくさんいる。学年内では把握できるが、全職員が課題を持つ子供一人一人を把握し、適切な対応ができるかといえば、共通理解は図るが難しい。学校行事において、個別の活動機会を設定しにくい。これは、小規模校は皆が主役になれると言われていたが、大規模校では個別の機会設定はしにくい。教職員相互の連絡調整が図りづらい。学年で集まるにしても、学年で同じ歩調で進めていかなければならないということは、教職員にも言っている。集まるにしても、出張であったり、保護者対応したりと、学年全員が集まるというのは難しい面があり、打合せがどうしても遅い時間になってしまうこともある。特別教室である音楽室や理科室、体育館、運動場の施設や設備、パソコンなどの利用に制約が生じる。パソコンを使用したい時期が重なると思うように使えなかったり、音楽を教室で行ったり、運動場でサッカーをやらせたいが 2 クラスが重なってできなかったりというような制約が生じる。休み時間一つのトイレに 200 人が来るとなかなか時間内に戻れないなど、施設面に課題がある。地域に出て行くことがあるが、200 人近い児童が一斉に動くことになると、実施内容が制限され、半分に分けて活動することもある。もう少し人数が少なければゆっくり見学できたり、ふれあいを深められたりするのにとと思うときがある。災害時等の緊急避難や引渡しの時には、千人以上いるので、混乱が生じる。今年の 1 学期に何回か警報が出て、教員引率の下、下校させたが、連絡がとれない児童は学校に残った。そのような場合、お迎えに来られるが、そのとき車が詰まって動かなくなり、苦情が入った。これが全校生となった場合のことを考えて、運動場を開放するなどのシミュレーションを行っている。このように動きづらい面がある。

	地域からの支援、地域との関連であるが、自治会や老人会等、地域の各種団体は、学校に対して大変協力的で、色々な面でご理解とご支援をいただいている。子ども見守り隊、スクールヘルパーを中心に、地域ぐるみで子供たちの安全を見守っていただいている。資料の写真は、スクールヘルパーの感謝状の贈呈式である。地域にこれだけお世話になっている、地域とつながっているということを子供たちにも意識させるという意味で、全校生の前でやっている。 おわりに、保護者や地域住民の中には、姫路市で一番児童数の多い学校ということに誇りを持っている方も多くおられる。今年になってから、「今年が一番か」と聞かれる。そのような方が多くおられる。学校に対して協力的である。今後も、学校、家庭、地域の連携を大切に学校運営を進めていきたい。職員数が多いというメリットを生かすために、組織としての教職員の連携がより効果的に機能するよう組織力に努めていきたい。施設・設備等の教育環境の改善・充実を進めていきたい。
会長	御意見、御質問を伺いたい。
委員	姫路市の連合自治会は、昨年から合併町の自治会に対してヒアリングを行っている。これは学校のことでなく、地域が疲弊しないかと問題意識を持っている。夢前町、家島町、香寺町、安富町を回った。一番の課題は人口減少と少子化である。ヒアリングは、学校の問題は置いておいて、地域の疲弊をどうするかという課題で取り組んだ。地域の課題の中に、学校の少子化の問題、合併廃校を危機感を持って話をされていたのが印象的であった。特に、夢前町は児童数が少ないということで自治会長が苦勞されて、色々な施策を考えている。行政にしても、連合自治会にしても、直接の対策というのが、なかなか取りづらいということで、今、今日発表を聞いたが、非常に心強い対策を考えておられると思った。 私は、学校は地域の中心だと思っている。学校の流れで、歴史、文化が地域と育っている。2,600万くらいの予算でやり取りされているが、お金の問題ではなく、どのような形で残していくのかという視点で考えてほしい。色々な工夫があると思うので、大規模校の課題も問題になった。これも、考えてみたら、安いところに家を建て替える推進ができるような施策を考えれば、地域住民も移動するだろう。その辺も含めて、全市的に各部局がしっかりと連動しながら取り組んでいくことに尽きると思う。

会長	私たちが、考えなければならないのは、子供一人一人の育ちである。発表では、学校規模によるメリット、デメリットを挙げていただいたが、児童数が少ないとどうしても切磋琢磨する場面が少なくなるので、大きくなって社会に出たときにどうだろう、といって、大きければいいというものでもない。大きいと、濃密な人間関係が育ちにくい、小さいと、人間関係は濃密になる。それぞれにメリット、デメリットがある。
委員	私なりにインターネットで調べさせてもらったが、欧米では、小規模校の方が適しているという意見が多い。しかし、調べていく中で何が良いのか分からなくなる。財政面では、学校に対する市の負担は国や県に比べて少ないかもしれないが、スクールバスを出すことになれば負担になる。また、廃校することになれば、耐震工事が後回しにされるのではないかということなど、いろいろな問題が出てくる。
会長	欧米で、学校規模が小さい方が良い点があるとは、どういうことか。
委員	グラス・スミス曲線というものによると、1学級の人数が少ない方が、学習効果が高いというデータが出ている。
会長	日本でも、全国学力・学習状況調査を小学6年生と中学3年生に悉皆で行っている。ここでは、学校規模ごとにも集計しているが、小規模だから成績が悪いということにはなっていない。しかし、学校教育においては、学力の問題とともに、社会性、つまり、大きくなって実際に仕事をしていく上で必要なたくましさなどの育成についての問題もある。
会長	3 議事 (1) 適正規模及び適正配置に向けた方策について 事務局からの説明を求める。
事務局	資料1「適正規模及び適正配置に向けた方策」を用いて、適正規模及び適正配置に向けた方策として、統合、通学区域（校区）の見直し、学校選択制の導入、山村留学・漁村留学、学校施設の増築、学校の分離・新設について説明

会長	ここには、二つの視点がある。一つは、小規模校の解消。もう一つは、大規模校の解消。これらについて、姫路市の実状を踏まえながら御意見、御質問を伺いたい。
委員	日本は高度経済成長してきた。その時代は、予算もあり、人材もあり、子供もいた。しかし、その時代が終わり、色々な問題が出てきた。方策を検討するときには、費用対効果の発想ではなく、子供たちや地域をどうすれば良いのかという発想で審議していかなければならない。子供の頭数が揃えば良いというだけの議論では、発想が貧困である。小規模校は地域住民も一緒になって、歴史を作ってきた経緯があるので、地域住民の意見を十分に聞かなければならない。また、統合する場合にも、十分な理解を得てからでないと、手を付けられないと思う。自治会は、小学校単位に組織しており、小学校がなくなれば自治会はどうなるのかという話に関係してくるので、この辺も皆さんとともに行政側とも検討していきたいと思っている。
会長	人口減少は全国的な課題である。 山村留学・漁村留学に関して言えば、島根県の隠岐島の高等学校で島留学制度を実施している。しかし、留学制度については、慎重に考えていかなければ絵に描いた餅となってしまう。
委員	学校は教育の場であるが、保護者から見ると、安全安心という環境で子供を育てたい。学校、地域、保護者の皆で子供を育てていく。色々な目が行き届くといった環境づくりが大事であると思う。 適正化の方策としてはたくさんあるが、これを、保護者が決断するという事はかなり厳しいことである。また、今決断しても、数年後児童が減ってきて、今後、再度決断する時期が来るかもしれない。 地域や保護者にとって、どのように進めていくのか不安があるので、慎重に進めていただきたい。この審議会についてもほとんどの保護者は知らず、適正化の話が進められていることを知らない。どのように決定し、決断していくのかというところについては不安である。
委員	2009 年度、山之内小学校が廃校になっている。その後、山之内校区がどうなったとか、地域のコミュニティがどう変化していったかということを知っておきたいと思う。

教育次長	山之内小学校は、平成 21 年度末で統合となった。統合に当たっては、地域の方と協議をしながら進めていった。この時、最大の課題とされたのが通学手段であったので、このことを中心に課題に対する対応等を考えていった。 学校の統合が、山之内地域に与えた影響等については、教育委員会としては、特に検証を行っていない。
会長	現在、特に、良くない状況が生じているということはないのか。
教育次長	統合後も、旧山之内小学校の P T A 等と協議する場は持っており、その中で、前之庄小学校に通うことになった子供たちについて、大きな問題は特にないとのことであった。 また、教育委員会の所管ではないが、旧山之内小学校の学校施設については、民間事業者が入られて、地域の活性化のために活用されている。
事務局	山之内小学校の廃校後、香寺ハーブガーデンという会社に施設の一部を貸し付け、現在はハーブ工場となっている。体育館は、避難所等として活用している。旧山之内幼稚園は、ハーブガーデンと地元で作られた会社により、農家レストランが営まれ、好評を得ている。 このように、学校跡が地域活性に活用されている。
委員	小規模校の 2 校の説明を聞いたときに、学校に対する誇りをしっかり持っておられると感じた。学校は、地域の教育の発信基地であるということは明らかである。 離島の中学校で校長をされていた方が話されていたことであるが、コミュニティ・スクールに移行し、小中一貫教育の新しい制度に移って学校を残す方法もあるのではないと言われていた。そのことが頭に残っている。地域としては、学校を残す方向で動かれると感じている。 資料には、適正化に向けた様々な方策のメリットやデメリットが示されており、デメリットにはお金の問題も述べられている。しかし、子供を中心として統廃合を考えていくということが、一番大事ではないかと思う。大人の勝手な都合だけで考えるの

	ではなく、子供たちを中心に考えていかなければならないと思う。
会長	島の学校については、頭において置かなければならない。
委員	少子化対策が一番の問題である。大規模校も小規模校になる可能性がある。私の校区もマンションが建ち生徒数が増えているが、数年すれば元に戻ってしまうだろう。少子化対策として、子育てできる環境づくりが一番大事であると思う。
委員	山之内小学校区の方から話を聞くと、学校がなくなると、地域の拠り所がなくなり、村は廃れていくと話されていた。また、若い人は子供のことを考えて学校へ通いやすい地域へ出てしまうので、村がもたないとも話されていた。 旧姫路市の学校は画一的な形をしているが、合併町の学校は、歴史や地域の特色を感じる建て方をしている。このことから、学校は地域の拠点であると実感する。 先ほどの発表の中で、小規模校の悩みとして、PTA活動が大変だと言われていたが、逆に言えば、運動会でも一人一役であるなど、PTA活動を皆でやろうという態勢ができているのだと思う。逆に大きな学校であると、自分はしなくてもだれかがやってくれるという思いになってしまう。子供もそのような親の姿を見ているのではないだろうか。最近では、子供が小学6年生になれば、PTAを辞める親がいる。PTA会長や役員になりたくないから。嘆かわしく思う。 自分が愛されている、大事にされている、このままの自分でいいのだと思うことで自尊心が育つ。それは、大規模の学校だと育みにくくなるのではないかと考えるので、大規模校も適正にしていくべきである。小規模校も、地域や子供たちが望むのであれば統合もあり得るが、今のまま頑張りたいと言われるのであれば、応援すればいいのではないと思う。
委員	教育の場として、学力だけではなくて社会性を育むために、適正な規模が必要であるという議論で前回は終わったと思う。本日の資料に示してある取組の方策を見て、こういう方法があるのだなと資料を見て知ったという状況である。これらの方策を画一的に適用させるというのは難しいと思うので、基本方針をまとめた上で、個別対応が必要であると思う。 先ほど、コストの話が出ていたが、教育は継続することを前提に考えなければいけ

	ないと思うので、その辺りもバランス良く考えていくべきであると思う。 小中一貫教育について、今年度、義務教育学校が設置された。このことは、適正規模や適正配置の話に絡んでくると思うが、義務教育学校と適正規模、適正配置との話はどのような位置関係にあるのか。
事務局	参考資料２の「魅力ある学校づくり」の(2)及び(4)の部分に記載している。これは、次の審議会で審議する予定である。
会長	この部分については、次回の審議において皆様から御意見をいただきたい。
委員	前は、全学年単学級の学級に勤めていた。小規模校は、小規模校なりの特色を生かした学校づくりが行われ、地域からも全面的な協力と支援をいただける。生活科や総合、環境体験事業のほか、防災に関しても地域と連携して防災訓練や防災教育が行うことができ、地域と密接な関係にある。統合すれば、地域との関係が希薄になり、子供たちの地域に対する思いがどうなるのか心配である。 以前、全校生７人の学校に勤めたことがある。その子供たちは、中学校まではなんとか頑張って行けたが、高校になると、たくさんの人と接していかなければならないことで、不適応となっている子もいた。長い目で見たときに、学力だけでなく、社会性を身に付けていくためには、適正規模というのは必要であると思う。 先ほど発表された小規模校の児童は、中学校でリーダーとなっているという話であったが、先の先を見たときに、やはり小さいうちからたくさんの人と接していくことは大切であると思う。 また、発表では地域の方の思いを聞かせていただいたが、小規模校の保護者の思いはどのようなだろうか。私が勤めていた全校生７人の学校は統合されたが、その保護者は、たくさんの子供の中で育てたいと言われていたので、その辺りは少し気になる。
委員	最終的には子供と保護者が決定するのであろう。我々自治会はオブザーバーのような形になると思う。当事者が本当に真剣に考える機会を作してほしい。
委員	先ほどの発表から、小規模校では先生方が本当に誠実で、良い教育をされていることが分かった。特色もよく分かり、素晴らしいと思った。大規模校、小規模校の両方

	とも、教育に対して熱心に関わっている姿が見られ、感動した。 私自身、小・中学校で3校ずつ転校したが、当時は子供の数も多く、そこで転校生として過ごしていく術を身に付けた。友達に揉まれ、物怖じしなくなった。そして、今の私がある。 勉強は一人でもできるが人間関係は友達に揉まれる中で育っていく。昔は、きょうだいがたくさんいたので、小さな地域でもたくさんの子供がおり、その中で人間性が育った。 今は、そうではない。少子化は、姫路だけでなく、国全体の問題である。 少子化となることを踏まえて、適正規模について考えていかなければならない。0歳児は100万人を切っている。そういった状況の中で、どうやって今の子供たちの育ちを保証していくか議論していかなければ、いつまでたっても変わらないと思う。はっきり言うと、変えていかなければならない。0歳児が小学校に行くようになるまでにあと6年しかない。 今の小学生が何年後かには高校生になって、巣立っていかなければならない。その子たちが、引っ込んでしまうのではなく、自信を持って自分の実力を出していけるような子を育てるには、ある程度の適正な人数が絶対必要であると思っている。そして、そのためにはどうすれば良いか考えて、お互いが納得しながら進めていかなければ解決はないと思う。色々な可能性を考えながら、前向きに考えていく方が良いと思う。 学校跡をどのように活用するかということも大事である。私は、前回子育て支援ルームを作れば良いと発言した。それは、そこに来る親子は、その地域が気に入ればそこに移住するからである。兵庫教育大学の中に子育て支援室を作った。最初は10組も集まらなかったが、今は年間約6,700人が利用しているので、加東市は人口が微増している。地域活性化は大事であり、工夫して乗り越えていかなければいけないと思う。
会長	資料にある取組を実際に行っていくときに、色々配慮や努力をしなければならないことがあるということを委員からご意見いただいた。これらの御意見を、今後の答申にまとめるときの土台にさせていただくということでよろしいか。
委員	異議なし

	8 議事 (2) 適正規模及び適正配置に向けた具体的な取組について
会長	事務局からの説明を求める。
事務局	資料2「適正規模及び適正配置に向けた具体的な取組」を用いて、小規模校及び大規模校における適正規模及び適正配置に向けた具体的な取組方策について説明
会長	御意見、御質問をいただきたい。
委員	取り組むというのは、廃校になるということか。
会長	大事なのは残った施設にどのような機能を持たせるのか、また、残った施設を地域のためにどのように使うのかということであろう。このことは、答申に入れなければならないと個人的に思っている。
委員	最終的には、保護者や子供、地域の声を十分聞いていただいた上で進めていただきたいと思う。 学校選択制については、以前、流行った時期があったが、今では廃止しているところが多いと聞いている。どうしても、人気のある学校が出てくるからであろう。 市内の街中で新しくマンションが建つとき、「当マンションは〇〇小学校区です。」と宣伝していることが気になる。特別な教育はしていないのだろうが、この例のように、学校の差別化を助長するような部分が学校選択制にはあるので、この方法はあまり現実的ではないと思う。 姫路には祭りが盛んな地域があり、一部実施が難しい地域もあると思うが、校区の見直しが一番現実的であると思う。
委員	現実的な案が並べてあるのだろうと思う。学校へこの取組を実行するに当たって、通学の問題や、秋祭りなどコミュニティとしての課題も大きいと思うので、その辺りをどのように解決しながら進めていくのかという辺りも合わせて提示ができることが望ましいのかなと感じる。

会長	これは、答申の案が出てきたときに、記載内容について意見を出していただきたい。頭に置いておいて、また議論することとする。
委員	学校選択制は、学校の人数が偏ってしまうことがあるので、大規模校や小規模校が増えることを危惧する。山村留学は、経験したことがあるがなかなか難しい。子供たちがそこで適応していくための方策や、受入れの方策を考えなければならないし、人数の多い年や少ない年があり入学する人数が読めない。従って、方法としては、統合か通学区域の見直しが適当であると思う。 その場合、地域や保護者と話し合って、納得して進めることが必要であると思う。
会長	やはり、話し合いを地域としていかなければならない。 また、自由選択制は弊害が多いので、やめておいた方がよいのではないかと考える。
委員	私は現在、各自治会に対してヒアリングを行っているが、人口減少、高齢化、リーダーの不足などにより、本当に連合自治会の体制を維持できるのかということを危惧する地域がある。合併4町にヒアリングをしたとき、最終的には、谷筋合併や川筋合併をして地域全部を一つの新しい地域にしないと仕方がないのかなという考えがある。各地域、小さい大きいにかかわらず、100年以上の歴史があり、色々な地域行事や神事があり、田舎の方は特に盛んである。一町ごとではなく、地域全部を大きく一つの地域にし、その中でブロックを構成するような形にする。そして、それを基にしてどのように学校を配置していくのか考えていく方が良いのかもしれない。もうすぐ廃村になるという地域があると聞いている。連合自治会の一角が崩れだすと、ばたばたと崩れていく可能性がある。そうなるまでに手を打ちたい。 今年から、旧市内もヒアリングし、精力的に自治会長の意見を聞いていく。今日もヒアリングをしたが、そこでは自治会長が高齢化して、かつ、後継ぎがいらない。民生委員も高齢化して後継ぎがいらないと聞いた。この課題は、旧市内の中でも出てきている。連合自治会が維持できるのだろうかという危惧を持った。 学校の統廃合に関しては、今までの意見を聞くと、2校を1校にするという進め方ではなく、もう少し範囲を広げて統廃合するのも良いと思う。 子供の将来のことを中心に考えて、保護者の皆様や地域の皆様の御意見を聞きながら、説得をしていただくということが一番良いのかなと思う。

委員

私はPTA会長をしているが、校区のPTAの中で地元の方はごく一部で、ほとんどは校区外から来られた方である。子供会も役員のなり手がない。祭りに出たくな
いからマンションに住んでおられる方もいる。自治会にも関わりたくないのだろう。
これらのことは、私として大変おかしく感じる。

PTA役員をしていただいている方は意識が高いが、それ以外の方をどのように集
めるのが課題である。PTAが受ける研修があり、役員が参加するが、役員は意識
が高いので、研修を受ける必要はない。意識の低い方をどうやって誘うのか、そこが
会長として悩んでいるところである。

委員

現任の中学校は5学級である。しかし、4学級の中学校は加配教員が付いて、9教
科の教員が揃う。本校の方が、学級数が多いのに9教科の教員が付かず、免許外申請
をしなければならないという状況である。学校は、学級数によって教員の数が決まる
が、中学校は小学校より教員の配当数は多い。

小学校を考えた場合、複式学級を解消することについては、先ほど、小規模校の発
表にあったが、複式学級であっても学力は高いという発表があった。それは、一人一
人をきめ細かく見て指導ができるからであろうが、それは、複式学級でなくても、指
導方法の工夫次第で十分可能ではないかと感じる。複式学級を解消することに取り組
むことは良いと思うので、生徒、保護者、地域の方が納得していれば、その方向で進
めていくべきではないかと思う。

私自身、大規模校区に住んでいる。そこは以前から大規模が続いている。最近、校
区内に新しく住宅地が作られ、そこは隣接校区の小規模小学校に通学してもよいこと
になっているが、実際に小規模校への就学を希望する児童はいないようだ。

大規模校の方が活気があるとか、小規模校は昔から住まれている方ばかりなので行
きにくいという気持ちもあるようだ。つまり、学校選択制を導入しても難しい部分
があるように思う。

先ほど、委員がフランスは少子化対策がうまくいったと言われていたが、フランス
の小さい規模の小学校が多いと聞いたことがある。

委員	ヨーロッパの多くの国はそうである。しかし、少人数と言っても、子供の数は20から25人程度である。先生の数が多い。児童数が増えれば学校を分離し、少なければ合わせてしまう。そうすることで常に適正人数をキープしている。
委員	資料については、特に意見はない。資料に関係して、方策の中で、例えば、川筋ごとの学校でグループを作ってグループ校とし、教科によっては、合同でやるという方法もある。そして、子供が増えてくれば、独立して授業をする。ただし、その方策が、どれくらい財政的にメリットがあるか分からないが、そのような段階的な方法もあると思う。 また、小規模校は社会性や協調性の力がなかなか身に付かないという話があった。なんとなくそうだろうとは思いますが、実際にデータとしてあれば良いと思った。 適正規模というが、目安として、最低児童数を示す方が良いのではないかと思う。目安があれば、地域の方も絶対そこにはさせないと力を入れて、IターンJターンとなる魅力ある地域づくりをするモチベーションになる。
会長	社会性に関するデータについては、事務局で一度探してみしてほしい。実際には、なかなか見付からないかもしれない。 事務局案では、複式学級の解消としている。そこからおよその人数的な目安は分かるだろう。
委員	配慮すべき子供や山の方で育てたいという家庭の子供、大規模校は少ししんどいという子供については、他の学校を選択できるようにしてもよいのではないかと感じる。 また、取組は同一中学校区内の小学校で行うとあるが、私の中学校区内の小学校は私立中学校に進学する子供が多いので、中学校は適正規模にならないかもしれない。なおかつ、隣接の中学校区も比較的小規模な小学校が多いので、同一中学校だけで考えてよいのか疑問に思う。 また、どのように進めていくのかといったスケジュールを、早めに具体的に示していただければ親として安心する。
会長	原則としては、中学校区内で良いと考えるが、今の発言のような状況であるのであれば、もう少し考える必要があるかもしれない。

委員

選択肢はあるようで、意外と少ないと感じた。現実的には、学級数の少ないところから進めていこうということであろう。そして、取組を行う際には、色々なことに配慮しながら、地域の方の声も含めて慎重に進めるということは、答申に書くべきであると思う。まず、初めの一步をやることは大切である。適正の集団人数というのは、研究によれば、20人程度と言われている。

日本人の良さとして、何かが起こったときに列になって並べるとか、その順番をきちんと守るとか、組織としてやっていけるなど、社会人としての日本人独特の力がある。そういったものは、30人から40人の学級集団の中で培われたものであると思う。これは、30人から40人が良いと言っているわけではない。集団の持つ意味というのはすごく大きいと感じている。

もう一つは、日本の先生方は優秀であるということである。海外の学校では20人程度の子供を2、3人の先生が指導しているが、日本では、一人30人から40人を見ている。色々なことをルール化して、しっかりとした学校教育を行い、きちんと子供の力を付けている。

以前から適正規模の基準はあったのだろうけれども、普段からそれだけの人数がいたから分からなかった。しかし、現在では児童が急に減ってしまったので、基準を決めなければならなくなった。

先ほどの意見にあったが、7、8人の集団規模であると、社会性の育成が難しそうだというのは分かるが、それがデータであるかどうかは分からない。

もう一つは、少ない人数で親のトラブルが起きたらということ。私自身も色々な学校で親のトラブルを経験した。少ない人数の中での親同士の問題は、子供の関係まで影響する。コミュニティというものの難しいところだ。

会長

皆さん大事なことをご指摘いただいた。これらを踏まえた上で、資料2にあるように、まずとりあえずは、複式学級を解消するようなプランを作る。次の段階として、クラス替えができることによって切磋琢磨できるので、各学年1学級の小学校に対して、クラス替えができないことを解消する取組を考える。この順番で進めていく。もちろん実施する上では、校区の再編成もあれば、統合もあるかもしれない。ただし、自由選択制は少し難しいかもしれない。山村留学も良いが、現実には色々な課題がそ

委員	こで出てくるかもしれない。従って、具体的には校区の再編成や統合となってくるのかもしれない。プランを作っていただいてまたそれを検討していただくという風にした方が良いのかなと思った。 取組が、付け焼刃のような気がする。駅前には立派になり、素晴らしい街づくりができている。今の子供たちは将来、その街の担い手になるので、そのような子供を育てるということを意識しながら、費用対効果だけに捉われることなく、ダイナミックに考えていっていただきたい。 姫路もそうであるが、兵庫県は外へ出る人が多い。兵庫で育つが出て行ってしまう。その原因は何かということを考えていただいて、市全体で呼び込みを行っていただきたい。他市も必死である。ぼんやりしている市はどんどん人を取られている。姫路市も、人が住みたくなくなるような大きな施策を行っていただきたい。
会長	複式学級は、先生にとっても負担である。一人で二つの学年を一度に教えなければならない。校務分掌も多い。したがって、具体的には、資料2のスケジュールで進めていくこととしたい。そして、この取組をきっかけとして、姫路で学び育つ子供たちが、姫路で教育されて良かったと言われるようにしていかなければならないと思う。
事務局	補足説明をさせていただきたい。学校選択制について、自由選択制は委員御指摘のとおり人気校に子供が集中するなど課題が多いと考えるが、事務局としては大規模校から小規模校への選択制の導入は可能であると考えている。 また、小規模校を残す場合の教育の充実策として、小規模特認校制度の導入は、これからの議論で出てくると考えている。
会長	資料1及び資料2を答申のベースとすることによろしいか。(異議なし)
会長	最後に、事務局から連絡事項はあるか。
事務局	4 連絡事項 次回は、8月20日月曜日の午後2時からと考えている。後は、会長とも相談の上、日程調整して、追って連絡申し上げる。 また、今後の予定をお伝えする。9月から10月にパブリック・コメントを実施した

会長	後、11月9日金曜日、12月21日金曜日を考えている。 5 閉 会 以上で本日の審議会を終わる。
----	---